

対人援助専門職におけるデス・エデュケーションの必要性について (Ⅲ) —青年期の分離個体化に着目して—

長友 真実 *岡崎 利治 **片岡 靖子 **前田 直樹

The necessity of Death Education to human service professionals (Ⅲ)
Concentrating on the Second Separation Individuation Process of Adolescence

NAGATOMO Mami, *OKAZAKI Toshiharu, **KATAOKA Yasuko, **MAEDA Naoki

Abstract

The purpose of the present study was to examine the effect of Death Education program on the view of life and death and borderline tendency in adolescence. Ninety university students took part in the program and then completed questionnaires with regard to attitude towards death and borderline tendency. The results demonstrated the notion of fulfilling life and deficiency of interpersonal relationship significantly improved. Hence it is necessary to examine the influence of the Death Education on ego identity diffusion, ego identity status and so forth.

Key words : Death Education, adolescence, view of life and death, borderline tendency

キーワード : デス・エデュケーション, 青年期, 生と死の捉え方, 境界例心性

2006. 1. 23 受理

問 題

終末期ケアを支える医療や福祉の分野に従事する者のメンタルヘルスを考える上で注目されているものの一つに、援助者側の未解決の「喪」の問題を扱うデス・エデュケーションがあげられる¹⁾。現在、研修、教育への導入が求められており、最近になって、医療・福祉分野の大学生を対象にしたデス・エデュケーションは多くなされるようになってきている²⁻⁴⁾。しかし、こうしたデス・エデュケーションがもたらす効果に関する研究は、自由記述や描画など質的なデータの分析を検討したものがほとんどであり、対象者の現状の把握および介入の評価の基準となるような尺度を用いて量的に検討した研究は極めて少ない。どのようなデス・エデュケーションが学生の心理

社会的発達において肯定的な影響をもたらすかを、個人の精神力動から明らかにし、実践場面において個人差を把握できるようにすることが必要であるといえよう。

心理学の分野で行われてきた死に関する研究では、死別体験が恐怖や不安だけでは表現されない命の尊さや、自分の生き方の自覚を含む体験であるという指摘など⁵⁾、死に対する心理を扱う際には、恐怖や不安といったネガティブな側面だけでなく、成長や発達といったポジティブな視点を取り入れた多面的な捉え方が重要であると考えられている⁶⁾。

死に対する心理の青年期における発達的变化をみると、中学生、高校生と学年が上がるにつれ、「死に対する恐怖」、「生を全とうさせようとする意志」、「身体のみへの生への執着」は低下し、逆に、「死を軽視した見方」は、

九州保健福祉大学 健康管理センター 宮崎県延岡市吉野町 1714-1 〒882-8508

*九州保健福祉大学通信教育部 社会福祉学部臨床福祉学科 宮崎県延岡市吉野町 1714-1 〒882-8508

**九州保健福祉大学社会福祉学部 臨床福祉学科 宮崎県延岡市吉野町 1714-1 〒882-8508

The Health Management Center, Kyusyu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki, 882-8508 Japan

*Department of Clinical Welfare Service, School of Social Welfare, Part of correspondence, Kyusyu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki, 882-8508 Japan

**Department of Clinical Welfare Service, School of Social Welfare, Kyusyu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki, 882-8508 Japan

学年が上がるにつれて否定されなくなっていた⁷⁾。さらに大学生になると、「生を全とうさせようとする意志」が強くなり、死について考えることは生きる意味を考えるとといった人生に対して死がもつ肯定的な意味が意識されるようになることが明らかにされている⁸⁾。

しかし、青年期における死に対する心理は身体的、認知的、社会的、情緒的な側面における緊張や曖昧さ、不安定さに影響されることが指摘されている⁹⁾。加えて、青年期において積極的に死と対峙することは自我同一性に深く関わりがあることや¹⁰⁾、Blos が、青年期を親から精神的に分離し、個を確立していく「第二の分離個体化」として位置づけ、抑うつ感情を引き起こすことから「喪」に似た仕事と指摘している¹¹⁾。また、葛西が青年の自殺や自傷行為は、生きる意味や一時しのぎ的な生の確認であると捉えられていると指摘していること¹²⁾などから、青年期における「生と死」の問題は不安的な青年期心性との関連が考えられる。この青年期心性と類似が指摘される精神病理に境界例があり、両者の類似性については、青年期心性の特徴である自我同一性拡散や感情のコントロールの悪さなど、サブクリニカルなレベルでの不安定な心理があげられる¹³⁾。境界例についての精神分析的理解としては、Kernberg や Mersterson のように対象関係におけるメカニズムとしての分裂機制を中核的問題とする葛藤モデルの立場と^{14, 15)}、Adler のように、ストレスや喪失感に直面したときに、抱えてくれる内在化された対象表象や記憶を想起する能力が弱いという欠損モデルの立場がある¹⁶⁾。重松は、一般大学生を対象にした調査から、境界例の対象関係におけるメカニズムが青年期心性においても見られるが、境界例心性の程度の高低にかかわらず、「良い対象」が存在することを指摘している¹⁷⁾。青年期の課題である自我同一性の確立に至っていない状態では、親や重要な他者との「関係性」の問題が一つの焦点になるという大矢の指摘¹⁸⁾からも、「関係性」を見直すことが青年期心性に肯定的な影響をもたらすものであることが示唆される。また、藤井は大学生の死に対するイメージを尋ねた自由記述の質的データから、「一人称」の立場においては、死は未知なるもの、「二人称」の立場では別れであり、死を関係性の中で捉えていることを示しており¹⁹⁾、デス・エデュケーションにおける「関係性」に焦点をあてることは重要であると考えられる。すなわち、良い対象関係という「二人称」の視点から「一人称」の「生と死」をみつめることがデス・エデュケーションにおいて非常に重要であると考えられる。

そこで、本研究では、良い対象関係を想起するようなメカニズムをもつよう、親や友人、趣味など自分にとつ

て大切なものを振り返り（想起）、それらを喪失していく過程（分離）をたどるよう構成されたデス・エデュケーションを行い、青年期の「生と死」の捉え方や、青年期の境界例心性にどのように影響するかを検討することを目的とする。

デス・エデュケーションの過程で終末期にある患者の立場から、死に行くときに分離していくものと考えられる重要な他者との「関係性」を振り返ることが、対人関係の不全感の解消や、自分が何者であるかといった自我同一性の達成など、青年期の境界例心性に肯定的な影響をもたらすものと推測する。また、生を全とうしようとする意志を高め、死を軽視することなく、死が人生に対してもつ肯定的な意味を考えることにつながるものと考えられる。

方 法

対象者 地方の4年制の私立大学の学生90名、女性42名 ($M = 20.08$ 歳, $SD = 0.66$)、男性48名 ($M = 20.63$ 歳, $SD = 0.67$) であった。学年の内訳は50名(4年生)、40名(3年生)であった。

調査の実施 平成17年4月から5月にかけて、「社会福祉援助技術演習」の一部として、社会福祉における終末期ケアをテーマとした一連のデス・エデュケーションは4週にわたって展開された(表1)。1週目に、医療ソーシャルワーカーによる終末期のケア事例の講義とグループ・ワークを行い、2週目に終末期におけるケアプランをグループで作成した。3週目に疑似体験プログラムを行い、4週目にその振り返りと援助者の立場から考えたケアプランを再度作成した。なお、すべての演習は担当教員が行った。介入の効果を測定するために、以下の質問紙を、本プログラムの1週間前(プレテスト)と疑似体験プログラムの直後(ポストテスト)に実施した。

質問紙 質問紙には、生き方や死への態度に関する調査であることを明記した。調査対象者に対するネガティブな影響を極力防ぐため、回答拒否ができる旨を口頭で説明した。

1) 「生と死」の捉え方について

「死」だけでなく「生」の部分も含まれる多角的な心理を捉えるために、生きることと死との両側面を重視した尺度と考えられる丹下の「死に対する態度尺度」⁶⁾に準拠した。

この尺度は、デス・エデュケーションの効果測定で使用することを念頭に作成されている。「死に対する恐怖」、「生を全とうしようとする意志」、「人生に対して死がも

つ意味」,「死の軽視」,「死後の生活への信念」,「身体と精神の死」,という多面的に死に対する態度を捉えた6つの下位尺度から構成されている。この尺度は、高い信頼性と妥当性が認められているものである。本来はそのまま尺度を使用することが望ましいが、本研究では、デス・エデュケーションの実施後に行うことなどから、対象者の負担を考慮すると、より簡便な尺度が必要であると考えられた。そこで、丹下⁶⁾が行った因子分析結果をもとに、6つの下位尺度のそれぞれの特徴を強く表すものと考えられる各下位尺度の因子負荷量がそれぞれ絶対値で.45以上の項目を選び、合計29項目を使用した（4段階評定）。

2) 青年期の境界例心性について

青年期の境界例心性については、一般青年を対象として作成された安立の「境界例心性質問紙」²⁰⁾を使用した。尺度は、「対人関係の不全感・低い自尊心」,「同一性拡散」,「孤独感・見捨てられ不安」,「感情易変性・衝動性」の4つの下位尺度からなり、35項目から構成される（4段階評定）。

3) その他

年齢、性別の他に、死別経験の有無、福祉に求められる援助観について質問した。また、演習の感想や援助者に望むことについて自由記述で回答を求めたが、本研究ではそれらの結果を省略する。

統計学的検定はSPSS for Windows ver.13 日本語版を用いた。

表1 演習の流れ

内 容	
第1週	終末期ケア事例の提示（講義）
第2週	終末期の患者のケアプラン作成 (グループ・ディスカッション)
第3週	疑似体験プログラム
第4週	振り返りとケアプランの作成 (グループ・ディスカッション)

疑似体験プログラムの内容

本研究で提示するデス・エデュケーションの疑似体験プログラムは、終末期にある患者を疑似体験し、生きることや死という問題を「だれかの」という三人称ではなく、自分自身の問題として考えることができるよう、岩井によって紹介された“Death Simulation Game”²¹⁾を、対象者である大学生に適合するよう改編した。

具体的には、当時、小説や映画を通して比較的、大学生に身近な疾患となったと考えられる白血病患者の死に

至るまでの物語を独自に作成した。その物語をとおして、学生が患者の立場に立ち、大切なものや人といった「良い対象」を想起させ、さよならと別れる作業をとおして喪失（分離）を疑似体験するよう構成された。物語の最後には、日常の生を感じさせるものへと展開するものとした。疑似体験プログラム終了後に、どのようなことを患者が望んでいるか、また、援助者の立場からはどのような援助を提供することができるかを個別に考えた後、グループで討議する時間を設けた。

すべての進行は演習の担当教員が行い、他教員1名と臨床心理士1名が個々の学生に対応できるよう配慮して実施された。

結 果

本研究では丹下の「死に対する態度尺度」⁶⁾の一部を用いたため、ポストテストに回答した90名を対象に29項目を既存の下位尺度ごとに信頼性係数（ α 係数）を求めた。その結果、.81（死に対する恐怖尺度）、.61（生を全とうさせる意志尺度）、.39（人生に対して死がもつ意味尺度）、.63（死の軽視）、.80（死後の生活の存在への信念尺度）、.76（身体と精神の死尺度）であった。一部、十分でないものがあったため、項目群を再検討し新たに下位尺度を作成し、安定性を求めたところ.63から.86という信頼性係数が得られた（表2）。

項目群の構成を検討し、基準関連妥当性について検討するため、90名と少ないサンプル数ではあるが、死に対する態度尺度から抜粋した29項目について因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った（表2）。その結果、因子は5つ抽出され、因子負荷行列において絶対値で.40以上の負荷を持つ項目を選択した。各因子の内容については以下の通りである。なお、既存の尺度は6因子からなるが、本研究では、死の軽視（4項目）が他の因子に含まれる結果となった（表2において、4つの項目を*で示す）。

第Ⅰ因子：存在の消滅や死後の未知性について恐怖を表す「死への恐怖」と命名した（高得点ほど死を恐れる）。なお、既存の下位尺度と同じ項目からなる。

第Ⅱ因子：魂の永続性や死後の存在を信じる「魂の永続性への信念」と命名した（高得点ほど死後の存在を信じる）。

第Ⅲ因子：自殺の否定、生命を尊いものとする「生を全とうさせようとする意志」と命名した（高得点ほど生を全とうさせようとする）。

第Ⅳ因子：身体の死より心の死を重視する「身体と精

神の死」と命名した（高得点ほど身体の死を重視する）。なお、既存の下位尺度と同じ項目からなる。

第Ⅴ因子：生から死について意味づけする「人生に対して死がもつ意味」と命名した（高得点ほど死に肯定的な意味があるものとみなす）。

介入前の得点傾向について、死に対する態度の介入前の各下位尺度の平均値から示された全体的な反応は、生を全とうさせようとする意志があり（生を全とうさせようとする意志：Mean = 12.09, SD = 2.30）、意識がない状態にある身体のみを生を無意味とする傾向（身体と精神の死：Mean = 9.87, SD = 2.04）を示した。他の下位尺度得点は、ニュートラルな反応を示した。また、境界例心性質問紙においても、安立²⁰⁾の結果と同様に、全体的にニュートラルな反応を示した。

表2 死に対する態度尺度（29項目）の因子分析結果

質問項目	I	II	III	V	VI
自分が存在しなくなるのは嫌だ	0.904				
自分が消滅してしまうと思うと恐ろしい	0.864				
私は死が怖い	0.829				
死んだ後、何が起こるか分からないので不安だ	0.639				
自分の死を想像すると嫌な気分になる	0.638				
死ぬと人々に忘れられるのが嫌だ	0.502				
死後自分の体起こることが怖い	0.488				
死ぬといかなる経験もできなくなるから嫌だ	0.437				
後に残される人の気持ちを考えて自殺はできない	0.396				
死後の世界はあると思う		0.791			
死んだ後、人はすばらしい場所へ行く		0.786			
人は死んだら魂は残ると思う		0.610			
人は死んでもまた別の人として生まれ変わる		0.610			
戦争が起きた場合、人を殺すくらいならば私は自分の死を選ぶ*		0.489			
身近な人でない限り、誰が死んでも私は関係ない*			0.768		
私は長生きしたくない			-0.649		
自殺はしてはいけない			0.469		
テロで死人が出たということはまるで他人事だ*			-0.450		
私は不治の病になっても自殺せず最後まで生きる			0.418		
本に出てくる死の場面で、私は死に関する考えを深めた			0.336		
もう意識が戻らなければ、私は機械で延命したくない				-0.689	
治る見込みのない病気ならば“安楽死”も権利として認めるべきだ				-0.666	
私はたとえ脳死状態でも生き続けたい				0.664	
いつか死ぬのだから、人生は無意味だ				0.204	
死は人間の進化の一端になっている				0.664	
死は人間にとって必要だ				0.536	
死ぬと苦痛を感じなくてすむ*				0.491	
“死”があるからこそ人は精一杯“生きる”のだ				0.476	
死について考えることは人を成長させる				0.373	

Ⅰ因子法（Kaiser）の正則化を伴ったプロマックス法

α係数

.86

.78

.67

.76

.63

デス・エデュケーションと「生と死」の捉え方

デス・エデュケーションが「生と死」の捉え方に対してどのように影響するかを調べるため、死に対する態度尺度の下位尺度合計得点について介入の前後でpaired t testを用いて比較した。その結果、「死への恐怖」（ $t = 3.31$, $df = 89$, $p < .001$ ）、「生を全とうさせる意志」（ $t = 3.59$, $df = 89$, $p < .001$ ）および「人生に対してもつ死の意味」（ $t = 3.34$, $df = 89$, $p < .001$ ）は有意に高くなった。しかし、「魂の存在に対する信念」（ $t = .44$, $df = 89$, $p < .64$ ）, および「身体と精神の死」（ $t = .15$, $df = 89$, $p < .88$ ）に有意な差はみられなかった。これ

らの結果を表3に示す。

デス・エデュケーションと青年期の境界例心性

青年期の境界例心性について、それぞれの下位尺度の合計得点を介入の前後で比較するため、paired t testを行った。その結果、「対人関係の不全感・低い自尊心」のスコアが有意に低下していた（ $t = 16.27$, $df = 89$, $p < .01$ ）。その他の下位尺度では、介入の前後に有意な差はみられなかった。この結果を表4に示す。

表3 死に対する態度得点のt検定

	pretest	posttest	t
死に対する恐怖	21.26	23.82	3.31 **
魂の永続性への信念	15.35	15.61	.44
生を全とうしようとする意志	12.09	13.32	3.59 **
身体と精神の死	9.87	9.83	.15
人生に対して死がもつ意味	11.71	12.82	3.34 **

** $P < .001$

表4 青年期境界例心性得点のt検定

	pretest	posttest	t
対人関係の不全感・低い自尊心	16.27	12.4	8.7 *
同一性拡散	15.61	14.89	1.08
孤独感・見捨てられ不安	15.61	16.32	1.04
感情易変性・衝動性	28.51	29.02	.45

* $P < .01$

考 察

本研究では、デス・エデュケーションの効果について、「生と死」の捉え方と青年期の境界例心性から検討することが目的であった。

本研究で実施したデス・エデュケーションプログラムは、終末期にある患者の立場になり、親や友人、趣味など自分にとって大切なものを想起させ、大切なものを喪失していく過程をたどるよう構成されていた。この過程をとおして、これまでの重要な他者との「関係性」を振り返ることが、生を全とうしようとする意志を高め、人生における死の肯定的な意味づけが高まるなど、生と死の両面を重視した捉え方になることを予測した。さらに、対人関係の不全感や自我同一性拡散などに特徴づけられる境界例心性に対して肯定的な変化をもたらすと予測した。

第一に、デス・エデュケーションが「生と死」の捉え方に与える影響については、「生を全とうしようとする意思」、「人生に対して死がもつ意味」が介入後に高くなる結果であった。このことから、「生と死」に関する

心理教育的な介入が肯定的な影響を及ぼすものであることを示唆するものと考えられる。しかし、「死への恐怖」が上昇しており、これは患者に自分を置き換えて体験した喪失感によってもたらされたものと考えられる。このことは患者の想いに共感した結果であると推測される。しかしながら、死への恐怖を感じるなど、デス・エデュケーションは、個人を大きく揺さぶることにつながると考えられる。そのため、安全な枠の下で行い、十分なサポート体制を整えた上で、学生が安心して取り組めるように配慮することが重要であることが確認された。その点について、本研究では、あらかじめ教員や臨床心理士がフォローアップをできるよう十分に配慮して行っているが、今後も経過を見守っていく必要がある。

第二に、青年期の境界例心性に与える影響については、「対人関係の不安全感・低い自尊心」が介入後に解消にむかうという結果であった。これは、柿川²²⁾が看護師を対象に、終末期にある患者の想いを共有できることを目的としたコミュニケーション・スキル研修後に、自己価値観 (Self Esteem) が上昇し、対人依存は低下がみられた結果とも一致している。さらに、北山が、「自分」とは「自らの分」としての居場所の保障や、being の保障によって本当の自己の発現をもたらされると指摘していることから²³⁾、重要な他者との関係性を振り返ることは、自らの生を確認し、自己価値の確認につながったものと考えられる。

しかしながら、本研究では、自我同一性拡散などその他の青年期の境界例心性への影響は認められなかった。Erikson によって青年期の課題とされた自我同一性の問題は、青年期になって突然浮上してくる問題ではない²⁴⁾。発達課題は、他の発達段階と有機的に結びつくものであるため、人間の出生から死までの各段階において解決せねばならない発達課題をとおして、青年は養育者や教師、友人、ひいては社会からの是認と評価によって自己の価値を形成し、自我同一性を獲得していくとされる。良い対象の想起については、すべての学生が大切なものをカードに書いており、これは、境界例心性の程度の高低にかかわらず、「良い対象」が存在するという重松の指摘と一致していた¹⁷⁾。一方で、なかなか分離することができず、そのままカードをもっていた学生が確認されていることから、他者との距離感を調整しつつ、自己存在感覚を保つという相反する二つの試みの中では、解決されていない再接近期のジレンマが再燃し、分離が困難であった学生がいたのではないのだろうか。大矢は、青年の自我同一性地位と親表象の特徴について検討し、自我同一性の「達成地位」にある者は、内在化された対象と

しての親への依存からの離脱がなされると考えられている²⁰⁾。これに対して、「積極的モラトリウム地位」では、両価的で葛藤的な要素を含んだ親表象との関係が特徴的である。つまり、それまで依存していた内的対象との関係から離脱することの罪悪感や、内的対象の喪失に伴う喪の過程が体験される。一方、拡散地位では、内的対象像に対して両価性の葛藤を体験すること自体が難しく、内的対象からの分離は困難とされる。

デス・エデュケーションによって「良い対象」を想起していても、自我同一性の地位の違いから、分離個体化の過程が違ったものとして体験されていたものと推測される。「良い対象」との分離における距離のとり方が異なれば、自我同一性が達成地位にある者は、分離に伴う「見捨てられ不安」が低いが、そうでない者は「見捨てられ不安」が高くなるといったことが予測されるため、デス・エデュケーションによる解決は困難であるといえよう。青年期の第二の分離個体化における同一性地位ごとの検討が今後の課題として残った。

本研究の問題点の一つは、尺度の構成について検討する際に行った因子分析において対象としたサンプル数が少なかったため、結果の解釈には方法上の限界に起因する不明瞭さが残ることである。今後よりの課題として書き添えておきたい。

今後とも、デス・エデュケーションは心理教育的な介入としての実践だけではなく、理論の精緻化が必要であろう。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、調査にご協力いただいた学生の皆様に深謝いたします。

本研究は、平成 17 年度九州保健福祉大学学内共同研究費「対人援助職におけるデス・エデュケーションの必要性について～デス・エデュケーション演習開発と効果測定～」(研究代表：片岡靖子)により実施したものである。

引用文献

- 1 西村良二：医療スタッフへのケア。日本医師会雑誌。129 (11)：1743-1746, 2003.
- 2 木村正治：大学生を対象にした「死の教育」(Death Education)の実践とその評価。学校保健研究。32(9)：443-450, 1990.
- 3 佐藤広美・湯浅美千代・田川由香、他：「老年期を生

- きる」を理解する授業の展開—シュミレーションゲームを用いて. 看護研究. 37 (4): 280-284, 1996.
- 4 庄司進一:『生・老・病・死を考える 15 章』実践・臨床人間学入門. 朝日選書, 東京, 2003.
 - 5 今井幸太郎: 死別体験の意義—“死”の心理と教育 (IV). 龍谷大学論集. 437: 2-20, 1991.
 - 6 丹下智香子: 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討. 心理学研究. 7 (4): 327-332, 1999.
 - 7 丹下智香子: 青年期前期・中期における死に対する態度の変化. 発達心理学研究. 15 (1): 65-76, 2004.
 - 8 丹下智香子: 身体部位提供への協力の意志と死に対する態度の関連—大学生と看護学生の比較—. Bulletin of the School of Education Nagoya University (Psychology). 45: 17-26, 1998.
 - 9 Noppe, L. D. & Noppe, I. C.: Dialectical themes in adolescent conceptions of death. Journal of Adolescence Research. 6: 28-42, 1991.
 - 10 Hankoff, L.: Adolescence and the crisis of dying. Adolescence. 10: 373-389, 1975.
 - 11 Blos, P.: The second individuation process of adolescence. Psychoanalytic Study of the Child. 22: 162-186, 1967.
 - 12 葛西康子: 「生きる意味」を求めて自傷行為を繰り返したケースの事例研究—自己存在の基盤としての主観的体験を構造化することの意味を探る. 心理臨床学研究. 18 (1): 25-37, 2000.
 - 13 成田善弘: 青年期境界例. 精神科治療学. 2 (3): 319-326, 1987.
 - 14 Kernberg, O. 前田重治 監訳: 対象関係論とその臨床. 岩崎学術出版社, 東京, 1983.
 - 15 Mersterson, J. F. 成田善弘・笹原 嘉訳: 青年期境界例の治療. 金剛出版, 東京, 1979.
 - 16 Adler, J. 近藤三男・成田善弘 訳: 境界例と自己対象—精神分析の内在化. 金剛出版, 東京, 1998.
 - 17 重松晴美: 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究—境界例心性を通して. 心理臨床学研究. 2 (6): 659-664, 2005.
 - 18 大矢泰士: 自我同一性地位と青年期の個体化過程—集団試行 TAT に見る親表象との関係から. 心理臨床学研究. 17 (4): 333-341, 1999.
 - 19 藤井美和: 大学生のもつ「死」のイメージ—テキストマイニングによる分析. 関西大学社会学部紀要. 95: 145-155, 2003.
 - 20 安立奈歩: 青年期の境界例心性に関する研究. 心理臨床学研究. 17 (4): 354-365, 1999.
 - 21 岩井美詠子: 体験型「生と死」の研修の勧め. ターミナルケア. 14 (3): 194-197, 2004.
 - 22 柿川房子: ターミナルケアにおける看護職の課題と教育の方法に関する実践的研究. 日本保健医療行動科学会年報. 17: 201-218, 2002.
 - 23 北山 修: 自分と居場所. 岩崎学術出版社, 東京, 1993.
 - 24 Erikson, E. H. 小此木啓吾 訳編: 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房, 東京, 1982.